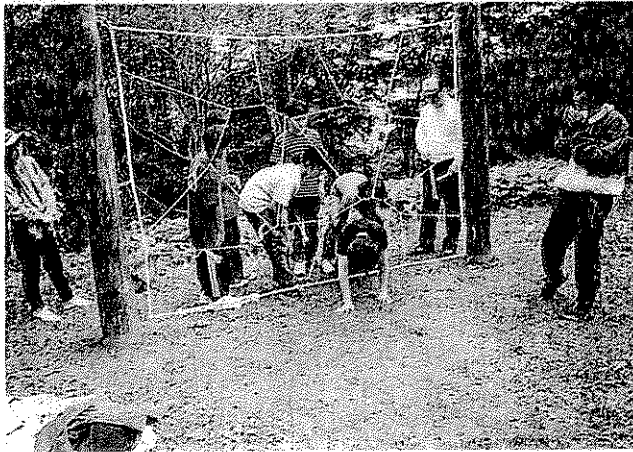


No.8 アクティビティの名称『くもの巣』

アクティビティの分類「社会的責任」



特 徴

ロープコースに設置されるローエレメントの一つです。一人が通れるような網目（ゴムひもなどを利用）があるクモの巣を全員が片側から反対側へ抜けるという課題をチームで解決します。くもの巣に体が触れてはいけないという大原則があります。ゲームは比喩的に使ったり、さまざまな進められ方が可能でしょう。ただし、体を持ち上げて移動することになりますので、もしものときは大事故になりかねません。実施に当たっては、安全への配慮が不可欠です。指導者はその活動が対象者にふさわしいものであるか、対象者同士がお互いに安全を確保し合えるかどうかなど十分に考慮してください。安全確保には技術が必要ですので、MAP研修やPAJ研修を受けられることをお勧めします。

活動の要素としては社会的責任の他に、他人に体を委ねる・委ねられるという信頼の要素も入ります。恐怖感やストレスがある活動ですので、チャレンジバイチョイスとフルバリューコントラクトの土壌があることも重要です。

Frequently Asked Questions

FAQ

- Q** プロジェクトアドベンチャー（PA）とみやぎアドベンチャープログラム（MAP）とはどう違うのですか。MAPとはなんですか。
- A** MAPとは、平成12年度から本格的に始まった県の重点施策です。PAの手法や考え方を県内の、学校教育全体及び地域における児童生徒の諸活動に取り入れるのがMAPです。そしてMAPも対象によって適切な取り入れ方は違いますから、各学校、プログラムごとにさまざまな形があります。
- Q** MAPは教育活動のどの場面で使えるのですか。
- A** 活動は学校であれば、体育、教科教育、学級経営、特別活動や、クラブ・部活動その他の人間関係づくりにも取り入れられます。また、体験教育や学びの環境づくりの考え方は主体的に学ぶ態度をはぐくむものとして、あらゆる場面で取り入れられます。
- Q** MAPを指導できるのは資格のある人だけですか。
- A** 実践することには資格は必要ありません。MAPの普及（指導者の養成）は、プロジェクトアドベンチャージャパン（PAJ）の講師もしくは県内のMAP指導者が行います。

Q 私は40人学級を担当しています。MAP (PA) の活動は大勢でもできますか。

A 大勢で触れ合うなどの活動は大人数でも可能です。グループで課題を解決する活動や、体を委ねるなど安全上の配慮が必要な活動は大人数には向かないものもありますが、その場合、目的に添って活動を選んだ上、工夫が必要になるでしょう。例えば、集団の分割、チーム・ティーチングなどです。

活動を行うだけでなく、そこで何が起こったかを参加者が知って考えること、指導者が観察し集団にフィードバックすることによってより気づきを促すことが重要です。

Q 教務や生徒指導で忙しい私でもできますか。

A 今までの校務に全く違う新しいものを取り入れる（負担）ということではなく、日常においても視点を変えてMAPの手法を取り入れると考えるはいかがでしょう。間接的に取り入れる（例：対象者との接し方）場合もあれば、ある場面ではゲームを使うという直接的な取り入れもでき、さまざまです。活動は何のためか、誰が指導するのかなどにより、学習者にとって活動の意味は全く異なります。

Q MAPの効果測定はありますか。

A MAPの効果測定については、現在、関係機関と共同で研究を行っているところです。

なお、PA独自の調査法はありません。米国ではTennessee Self Concept Scaleを使いハーバード大学の先生方が自己概念に関する調査を行い(1980年代)、プログラム開始前と後では自己概念に大きな変化が見られたという調査結果が出ました。日本では継続してプログラムを実施

している学校の先生方が子どもへのアンケートという形でデータをとっています。

Q MAPを学校に導入した場合の効果は何が期待できますか。

A それは実に多種多様でしょう。考えられるのは、体験的に学びの環境（安心して冒険できる仲間）づくりをしていくと、一人一人の個性を認め合う(多様性の尊重)集団ができることによって、ひいては豊かな人間関係につながるのではないかということです。また、主体的に学ぶ・失敗を恐れずアドベンチャーをする集団では学びが活性化し、共同学習が自然に身に付きます。学校がそのような場であれば、学校に来るのが楽しくなって、学校に来たいと思う子どもが増えるのではないのでしょうか。

Q マニュアルがほしいのですが。

A MAPが体験学習に基づいていることを考えると、実際に研修で体験し、それを「自分ならどうするか」を考えるのが一番効果的でしょう。実践例や市販のゲーム集はサンプルとしてお考えください。活動は学習者（対象者）を取り巻く環境や背景、活動の目的などで工夫が必要になるでしょう。「こうしなければいけない」とか「これをやればこうなる」というものではないことを頭に入れた上で活動することをお勧めします。

Q ゲームには決まった道具が必要ですか。

A 道具を使って活動するものもたくさんありますが、道具なしでできる活動もあります。安全に配慮した上で、ご自身で活動及び道具を工夫するなどアイディア次第です。

なお、活動のための道具が入っている*PAキットは、各教育事務所、MAP事業の活動推進校（小・中学校）及び研究指定校（高校）等に計画的に配置していますが、詳しくは48ページに記載の関係課にお問い合わせください。

Q プロジェクトアドベンチャーといえどトラストフォールですか。

A PAの活動の中では大変インパクトのあるものですが、数ある活動の一つです。これは一方で参加者の身体的・心理感情的危険性も含んでいます。他にも楽しい活動、触れ合う活動などいろいろありますし、そのゲームの準備ができる状態になるまで、信頼や安心感が集団の中にはぐくまれた上でできるものです。指導者としては安全上責任を負いますので、研修の場で自分自身が体験し、指導できる自信を付けた上で実践することを強くお勧めします。

Q プロジェクトアドベンチャーの活動は大体どれくらいあるのですか。

A グループで行うアクティビティは数百と言われますが、実施する環境によってできるものが変わりますので、一概にいくつと言えません。また、実践者の中にはバリエーションをつけたり、応用したり、ゲーム自体をつくったりしている人もいます。そのような数は正確には把握できないのが現状です。また、実践者は、活動の目的に合わせた使い方をしています。

Q 活動に参加しない(サボる)こともチャレンジバイチョイスですか。

A 参加しないということは、その場にいなくてもいいとい

うことではありません。共通体験の場から参加者を除外、仲間はずれにはしません。チャレンジバイチョイスは「参加の仕方を自分で選ぶ」ということですので、参加者は違う形（例えば、走らないけれどストップウォッチの係をするなど）での参加を求められます。グループで個人個人がどのようにかわるかを決めたものです。

Q PAの活動は、小さい子どもたち(小学校低学年や幼稚園児)でもできますか。

A 考え方や活動を応用して発達段階に合わせれば可能です。その場合、認知（考えることや考えたことを言語化すること）よりも、情動（気持ちや動き）に焦点が移ります。実際、アメリカでは小学校就学前の児童から低学年までを対象にしたゲーム集（日本語未訳）もあるほどです。

Q PAは、構成的グループエンカウンター（SGE）とはどのように違うのですか。

A 手法のルーツはエンカウンターに由来しますが、同じルーツを持っており（グループエンカウンター: Carl Rogers）、一人一人が生きる集団づくりを目指している点では共通しています。ただし、構成的グループエンカウンターは、学級の授業時間内でできる活動、人間関係づくりに特化されています。PAの活動はそれほど対象を仮定したり、特化していませんので、取り入れられる範囲は広いようです。また、「冒険」の考え方は冒険教育独特のもので、実践者は違いにこだわるよりも、良いところをいかに使えるかを考えてはいかががでしょうか。